
大阪球場

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大阪球場

【Nコード】

N0447E

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

大阪球場の跡地に来た年輩の夫婦。二人は暖かい目で出会った時からそのことを思い出し合う。舞台は南海の難波駅のすぐ側です。

第一章

大阪球場

難波にその球場はあった。しかしそれを憶えている者はもうあまりいない。

古い話だ。そこに球場があったのは。

「昔な、ここに野球の球場があったんや」

「そうやったん」

そこを通り掛かった老人が自分が手を引いている小さい子供に話をしている。それは孫であろうか。その老人の言葉を受けてその球場があった方を見ている。そこにはもう野球とは全く関係のない住宅博覧会がある。野球の面影はもう何処にも存在してはいないと言えた。

「南海ホークスっていうてな」

「南海ホークス？」

子供は老人の言葉を聞いて言葉に疑問符をつけてきた。

「何、それ」

「ああ、それも知らへんか」

老人はそれを聞いてあらためて声をあげた。

「ほら、福岡の方にな。野球のチームがあつて」

「うん」

そこから話をはじめていた。

「ソフトバンクホークスっていうやろ。そのチームは昔大阪にあったんや」

「大阪に野球のチームがあったん？」

「うむ。今は本物のチームはおらんようになったがな」

この老人はオリックスが嫌いであるらしい。少なくとも彼の好みではないようだ。

「あつたんだ。二十年も前に移つてな」

「僕が生まれるずっと前やね、それって」

「そう、ずっと前」

老人はその子供の言葉に頷いた。

「つい昨日のことに思えるけれど二十年前の話になるんやな」

「僕、よくわからへん」

子供にとつてはそうだった。

「それを聞いても」

「見てなわからへんものや」

老人はまた言った。

「けれど教えることはできるから。ここに野球する場所があったのは憶えておきや」

「うん、わかった」

「また。話たるさかいな」

老人はそう言いながら子供と話をしていた。そんな二人の話を聞きながらもう還暦を迎えようという二人の男女がその住宅博覧会の前を歩いていた。

「なあ」

男の方が先に女に声をかけてきた。髪が八分程白くなり四角い眼鏡をかけている。ラフな格好だがかなり真面目そうな雰囲気である。

「憶えてるかな」

「憶えてるで」

その隣にいる女が微笑んで答えた。もうその顔には皺が何本も刻まれているが若い頃は奇麗だったのを思わせる顔をしている。二人はその住宅博覧会の場所を見ながら話をしている。

「はじめてデートしたのここやったな」

「そうやな。あんたがスケートしようって言って」

それを女に対して語る。

「それで一緒に行ったのがはじまりで」

「あの時はスケートに凝ってたから」

女はそう答えた。

「だからいつもやっててん」

「何かあの時は有名になつててんで、あんた」
「そうなん？」

「そや。大阪球場の小枝子ちゃんってな」

「ここで彼女の名を呼んだ。」

「有名やつてんで」

「そやつたらお似合いのカップルやってんな」

その小枝子は彼の言葉を聞いて微笑んだ。

「ボーリングの衡平君とで」

「そういえばあの時俺はボーリングに凝ってたな」

衡平も自分の名前を聞いて微笑んだ。

「ほんま好きやったな」

「大阪球場にあつたんはスケートやったさかいな」

「ああ。それでもここには結構行つたで」

だが衡平はこう小枝子に答えた。

「何でなん？」

「古本屋あつたやん」

そう彼女に言う。

「あの辺りに。あつたの憶えてるか？」

「ああ、そつちのところやったな」

衡平の指差したところに目をやる。住宅博覧会の右手、二人から見て左手であつた。今二人の前にはマクドナルドがあり道が続いている。パチンコ屋も見えればコンビ二も見える。二人が若い頃の難波とはまた違っていた。

「うちはあまり行かへんかったけど」

「本好きやつたんちゃうんか？」

衡平は小枝子に対して問うのだった。顔が少し笑っている。

「それで何でここに来んかったんや」

「うっん、欲しい本はすぐに手に入ったから」

小枝子は首を捻りながら答える。

「それでやねん。ここの古書街にはあまり行かへんかったん」
「そうやったんか」

「そうやねん。一杯古本屋あつて気にはなつてたけど」
「わしは結構行つたで」

衡平はそれである。

「安かつたし。掘り出しもんがようさんあつたしな」

「それでやったん？ここに結構来てたんわ」

「まあそれもある」

自分でもそれを認める。それに頷きながら前に出ると小枝子もついて来た。

「実際のところな」

「それもあるつてことは他にもあるんやね」

「野球も好きやつた」

住宅博覧会の中に入るとそこにはもう野球の面影はない。既に過去のものになつてしまつてゐる。だが衡平はそこに野球を見ているのであつた。その見ているものを前提にして小枝子に対して話すのである。しっかりとそこにあるものを見たうえでの話であつた。

「南海ホークスがなあ。杉浦が投げて野村が打つて」

「うちそれは知らんで」

「何や、南海線におつてもか」

「阪神ファンやもん」

そう言い返すのであつた。

「一応南海のことは知つてたけれどな」

「野球はやっぱリーグやるが」

これは衡平の考えである。しかし小枝子は違ふのである。

「ちやうんか？それと」

「うちはちやうで。ここに来てたんはやっぱり」

「スケートかいな」

「そういうことや。それであんたと会つたんやないの」

笑つて言つのであつた。笑いながらかつてスケート場があつたそ

の方を見るのであった。自然と衡平もそちらに顔を向けていた。

「滑つてたあんと」

「そやったな。そういえばあの時は」

応える夫の顔にも笑みが浮かぶ。昔を懐かしむ優しい笑みであった。

「何かあつたん？」

「いや、滅茶苦茶気分がよかつたんや」

笑みが明るいものになる。それを自分でも感じて笑う顔であった。

「南海も勝つてな」

「結局野球かいな」

夫の言葉に呆れた顔と声になったがそれでも悪い気はしてはいなかった。

「しゃあないな、ホンマに」

「それで御前が奇麗に滑つててな。目がいつてもうて」

「そうやったんか。何か話を聞いてたら」

「どないしたんや？」

「いや、思つてきたんや」

小枝子は自分の心にあるものを少しずつといった感じで言葉を出していく。だがそれは決して苦しいものではなく明るいものであり続けている。

第二章

「うちとあんたは。野球で知り合つたんかな」

「そうかもな。いや」

衡平も妻の言葉に頷きかけた。しかしここで言葉を少し変えることになった。

「それはちやうと思ふな」

「ちやうんかいな」

「そや。わし等が会つたんは野球のおかげやあらへん」
そう妻に述べる。

「じゃあ何のおかげや？」

「ここのおかげやろ」

丁度かつてのマウンドがあつた場所に立つ。そこで多くのピッチヤーが投げてきている。杉浦も稲尾も鈴木も山田もだ。それだけの歴史があるのだ。

「ここのかいな」

「だってそうやろ」

衡平はまた言う。

「ここにおつたからわし等は会つたんや」

「ここに二人がおつたから」

「そや。この球場におつたからや」

マウンドから周りを見る。すり鉢状の球場が見えている。今の二人には。

「わし等がな」

「あの時にやね」

「この球場にな。まあ野球でわしは機嫌よおなつてたけど」
にかつとした笑みになる。自分でもそれは否定はしない。

「けど。ここに球場がなかったら」

「うち等は一緒になつてへんか」

「そやな。それ思うとこの球場はわし等にとってはあれやで」

「あれ？」

「そや、何ていうかな」

衡平はここで言葉を慎重に選びだした。

「うつんと。言葉が少し出て来んけど」

「じれつたいなあ」

小枝子はそんな衡平を見て少しいらしたのを感じた。彼女もせっかちな性分だが衡平も実際のところそうなのだ。だからそんな彼を見るのも珍しいことだったのである。

「言うことはよ言いや」

「わかつとるがな。だからあれや」

衡平は口を尖らせて小枝子に言い返す。彼も妻の言葉に少し怒っていた。

「結びの神様や」

「縁結びかいな」

「そついうことや」

やっと言葉が出たことに対して満足した顔になる衡平であった。

「ここに球場があったからわし等は一緒になれたんやで」

「そやな。それはな」

小枝子も今の言葉にすぐに頷いた。

「その通りやな。やつぱりここがなかったら」

「わし等は。会うこともなかったな」

「そう思ったら不思議な話やで」

今度は小枝子が足を前に出す。行くのは球場の外であった。

「あそこで。スパゲティを食べることもなかったやろうし」

「スパゲティ？ああ」

衡平は小枝子の今の言葉にふとした感じで応えた。顔もそうした感じであった。

「あつたなあ。量がたっぷりあつて」

「二人で食べたやん。ワインも飲んで」

「そやそや。何かしよつちゅうここに来てたんやな」

「野球だけやあらへんかったんやで」

小枝子にとってはむしろ野球以外のことが重要な場所であったのだ。これは衡平とは違っていた。しかし感じているものは二人共同じものであるのだ。

「色々。二人で楽しんだんやな」

「そうやねんな。今それがわかってきたわ」

衡平も今それがやっとなつたのだ。自分でもそれが不思議だった。

「ここで。二人で」

「二人の思い出の場所やねんで」

小枝子にはこりと笑った。それを今感じたからだ。

「ここは」

「もう。なくなつたけれど」

そう語る衡平の顔も明るさはあれど暗さはない。

「そやな。思い出の場所やな」

「そうやで。なああんた」

あらためて夫に声をかける。

「何や？」

「またここに来よ」

夫に対してこう言葉をかけるのであった。

「ここにかいな」

「そや。もう野球はやつてへんけど」

「ああ」

それはもう言うまでもない。実際には球場ですらなくなっている。大阪球場はもうないのだ。少なくとも今ここにはなくなってしまうている。

「それでも。ええやん」

「そやな」

そして衡平も小枝子のその言葉に頷くのであった。

「思い出の場所やしな」

「二人の」

二人の言葉がここでまた合わさった。

「そやから。また」

「わかったわ。じゃあまたな」

「うん。二人で」

「ただ。二人でやで」

衡平はここでこう注文をつけてきたのであった。小枝子はそれを聞いてふとした感じの顔になって夫に対して問うのであった。

「二人でやの？」

「アホ、じゃああれか？」

一旦妻をアホと言ってからまた言う。

「ここに子供等連れて来るんか？どや、それは」

「アホ言いなや」

今度は小枝子がアホという。顔はまた笑っている。

「デートに子供連れて来る人があるかいな」

「そやからや。ええな」

また妻に対して言った。

「二人で来るで、また」

「わかったわ。そやったら二人で」

「そういうことやで」

二人でお互いの顔を見るがその顔はお互い笑っている。二人はまたマウンドの上にいるがそこで顔を見合わせているのであった。そうして何時までも見合っている。二人の思い出の大阪球場の中で。あの時はじめて会った時のように明るく朗らかな笑顔で。

2
0
0
8
.
2
.
5

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0447e/>

大阪球場

2010年10月8日15時37分発行